The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

| | |
|---|---|
| Title | 報告Ⅰ　石濵純太郎と石濵文庫 ： 整理・調査・研究の現状 |
| Author(s) | 堤, 一昭 |
| Citation | OUFCブックレット. 2015, 7, p. 5-13 |
| Version Type | VoR |
| URL | https://hdl.handle.net/11094/51476 |
| rights | |
| Note | |

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

**報告 I**

# 石濵純太郎と石濵文庫：整理・調査・研究の現状 (1)

堤　一昭

## 1．石濵純太郎とその研究

石濵純太郎（1888-1968）は，漢学から東洋学へ進んだ第一世代の東洋学者たち，那珂通世（1851-1908），内藤湖南（1866 -1934）らに続き，大正から昭和戦後期にかけて活躍した第二世代の研究者である。石濵は内藤湖南に師事したが，直接の受業生ではないため“外様大名”と自称し，また自他共に“町人学者”とも称した(2)。彼は，当時の東洋学で最先端の分野であるモンゴル語･西夏語･ウイグル語の文献研究, 敦煌学などの“草分け”の一人であった。手がけた諸分野は，彼から影響を受けた次の世代に開花したといえる。西田龍雄の西夏文字解読，藤枝晃の敦煌学，大庭脩の江戸期漢籍輸入・受容の研究などがあげられよう(3)。

## 2．石濵文庫のこれまで

現在までの石濵文庫の歴史には 3 つの時期がある。各時期と注目すべき事項をあげたい。

第一は，1968 年の蔵書受け入れから『石濵文庫目録』（1979 年）の刊行までの時期である。大阪外国語大学に受け入れられるにあたって，純太郎長男の恒夫とその友人司馬遼太郎の関わりが大きかったと伝えられる。また蔵書の一部でなく，すべてを受け入れたことは文庫の特徴である。石濵の学問を反映して多言語にわたる図書・雑誌等の整理には時日がかかったが，1979 年に索引まで備えた文庫目録が刊行された。ただ，受け入れはされても目録には載せられなかった整理途上・未整理の資料も多く残されたのである。

第二は，大阪外国語大学が上本町から箕面キャンパスに移転した 1979 年からの時期である。25 年にわたり「石濵文庫記念学術講演会」が計 13 回開催され，これが文庫関連の主な事業となった。ようやく 1997 年度に整理途上・未整理の資料の仕分けが行われ，およそ約 13,000 点あることが判明した。書簡類の整理などが開始されたが未完のままとなった。

第三は，2004 年の「国立大学法人化」前後から現在にいたる時期である。法人化に際して貴重図書問題専門委員会が設けられ，石濵文庫を含めた貴重図書の再検討が始まった。筆者が石濵文庫資料の調査を開始したのも，この委員となったことがきっかけだった。外大・阪大の統合後，文庫目録の刊行 30 周年を記念して 2009 年に「石濵文庫記念講演会」が開催された(4)。2009 年度には洋書，2010 年度に漢籍が全国データベースに参加し，検索可能になった。2011 年度から大阪大学附属図書館「研究開発室」の課題対象資料に石濵文庫が追加された(5)。2014 年度には，豊中キャンパスの総合図書館Ｃ棟改修工事により貴重コレクション室が設けられ，箕面キャンパスの外国学図書館（旧大阪外大図書館）の石濵文庫を含む貴重書が移された。

## ３．石濵文庫の特色

### a．モンゴル語・満洲語・ウイグル語・チベット語に関する資料

この種の資料が多いことは外山も指摘する。蒙漢・満漢など漢語とのバイリンガル図書については，文庫目録の「漢籍の部」に載る。それ以外，モン

ゴル語・チベット語の仏典，満洲語・チベット語バイリンガル文献などは，その一部の写真が文庫目録の「写真の部」に載せられているが，専門研究者による整理，概要の把握を待つ段階である[6]。

### b．「いわゆる俗書（“ゲテもの”）」

外山は「当時の京大（帝大）などでは購入をはばかる種類の書物には，とくに目をかけて集めている」と指摘するが，具体的にどの図書かは挙げていない。ただ目録記載・未載を問わず，稀少・重要な資料の再発見は今後もあるだろう（以下に言及する *Барга* など）。

### c．拓本資料

約 1300 枚ある。中国龍門石窟の造像記が 3 分の 2 を占める。書道史上の名品をはじめ，1935 年の満蒙史蹟調査“羽田ミッション”で採拓されたモンゴル文･漢文バイリンガル碑文等の拓本一式など学術的価値の高いものが含まれる。種類別の整理まで完了したが，全体の目録はまだ作製されていない[7]。

### d．写真資料など

印画紙焼き付け写真が主で，ガラス乾版･フィルムは少ない。アルバム「石濵文庫写真集」1～23 巻に貼りつけられたものは，部分的にキャプションを書き込んだ付箋が付されており，それら等により概要目録のみは作成した。華夷訳語（乙種・丙種），西夏文仏典ほか漢語も含む諸言語典籍資料の写真が大部分である。龍門石窟旧状写真 100 枚[8]も含む。そのほか未整理の写真が多数ある。なお文庫目録編纂時に「1570 cut」撮ったというネガフィルムも現存するが，大部分は資料の部分写真のようである。

### e．書簡

差出人（1471 名）別に整理済のはがき 6294 通のほか，書簡が約 5000 通あると推定されているが，段ボール箱内に散在している書簡もあり，全容はまだ把握されていない。ニコライ・ネフスキー，石田幹之助ら，桑原隲藏および友人の画家・小出楢重に関わる書簡のみは研究がある[9]。

### f．20 世紀前半の日本・アジア関係史資料

今後注目されるべき資料群は，20 世紀前半の日本と東北アジア，東南アジアの関係史に関わる多言語資料である。整理途上・未整理状態のものも多い。まずは移転後の書庫コレクション室内での資料の所在と概要を調査する必要があり，多言語・多分野にわたる専門家の連携・協力が不可欠となる[10]。本日の研究セミナー（「戦前期モンゴル語新聞『フフ・トグ（青旗）』のデジタル化と公開の可能性」）に関わり，二つ例示する。

第一は，*Köke tuγ*『フフ・トグ（青旗）』のほか，奉天・新京・張家口・フレーで発行されたモンゴル語新聞である。*Köke tuγ* は，1940 年代前半，満洲国で日本が関わった文化・民族政策と民族の関係を知りうる資料であり，ほぼ全号が揃うのは世界的に見ても石濵文庫のみである。原紙のほか，ゼロックスコピー，マイクロフィルム，マイクロフィルムから焼いた CD などのかたちで，また付録のカレンダー2 枚（“チンギス・カン像”，タンカ）も保管されている[11]。これらの新聞の保存・公開・学術利用への展望を拓くのは，所蔵者の責務だろう。

第二は，A. バラーノフ『バルガ（*Барга*）』（1912 年）である。本書は，ロシアの中東鉄道警備隊がハルビンで刊行した，ホロンボイルのバルガ・モンゴル族について書かれたロシア語の報告書である。辛亥革命後の独立運動などの状況を意識して書かれたものと田中克彦は指摘している[12]。田中はほかに，石濵文庫のシベリア地域の民族問題に関わる資料として，イディッシュ語新聞『*Биробиджанер штерн*（ビロビジャンの星）』1937 年，『*Вольная Сибирь*（自由シベリア）』1927～1928 年の存在も紹介している[13]。

### g．その他

石濵自身の研究ノート・メモ・原稿類は，いまなお整理を待つ状態である。内藤湖南のヨーロッパ調査旅行（1924～25 年）に石濵が随行した際の，石濵のパスポートやヨーロッパ各地の絵はがき類も同様である[14]。

## ４．整理・調査・研究の現状

石濵文庫資料の保存とデジタル化による公開・学術利用にむけては，ようやくスタートラインに立ったというのが現状である。すでにマイクロフィルム化，電子ファイル化したものはごく少数で，上記の *Köke tuγ* などのモンゴル語新聞のほかは，和書の稀覯書（慶長刊本，森立之自筆写本など）のみである。

保存と公開の面では，今年 2014 年秋に豊中キャンパスの総合図書館に移転した石濵文庫ほかの貴重資料には，移転前からの基本的な課題もある。外国学図書館の貴重書庫内で分散して置かれていた状態をまずはそのままの形で移転した図書・逐次刊行物・諸資料を，請求番号の順やまたは資料の種別によって再排架することが公開のために必要である。また写真，拓本，書簡の資料を適切な保存専用用具による保管方法に改めていくことも重要である。

公開と学術利用の面でモデルとなる大阪大学での先行例には，①機関リポジトリ「大阪大学学術情報庫 OUKA（Osaka University Knowledge Archive）」での貴重書公開，②文学研究科の付属施設「貴重資料室」の収蔵資料画像 DB（ただし研究科内限定），③総合学術博物館の「本学各部局所蔵の貴重資料」サイトでの画像公開がある。

**◎科研「東洋学学術資産としての石濵文庫の基礎的研究」**

筆者が 2004 年度以来行ってきた石濵文庫の再調査，平成 23，24 年度の大阪大学文学研究科共同研究の蓄積を経て，今年度から取り組んでいる研究計画である（科研基盤（C），平成 26～28 年度。代表：堤，　3，400 千円）。現在の研究状況から見て学術的価値の高い資料群（①拓本，②写真・ノート他，③重要・稀覯図書，雑誌・新聞）について調査し，全容の目録作成とその中の貴重資料のデジタルアーカイブ化にむけての整備をおこなうことなどを目的とする。

本研究計画では，言語を含め資料の多様さに応じた研究者や研究グルー

プとのネットワーク作りが不可欠であり，本日の研究セミナーもその一環である。今後は，資料公開に際して著作権・公衆送信権の問題をクリアするために，知的財産権をめぐる法制度と法曹実務に明るい専門家の協力を得る必要も出てくるだろう(15)。

最後に二点，これまで述べてきた以外で，今後の石濵文庫資料の研究で注意すべき事項を挙げておきたい。第一は，大阪大学の懐徳堂文庫，関西大学の内藤文庫，泊園文庫の研究との連携が不可欠ということである。石濵文庫を含めた４つの文庫は，江戸時代からの大阪の漢学から東洋学への発展をたどり得る点で重要なコレクションである。しかも石濵純太郎はその全てに深く関係し，特に泊園文庫の研究と石濵文庫の研究は密接に関わると考えられる(16)。また懐徳堂文庫，内藤文庫，泊園文庫は，資料保存とデジタル化による公開において先行しているためでもある。

第二は，国文学研究資料館が現在進めている「日本語の歴史的典籍の国際共同研究ネットワーク構築計画」（大阪大学も参加）への関わり方を考える必要があることである。この計画では「近代以前（江戸時代末まで）に，日本人によって書かれた書物」を対象とする。石濵文庫には，これに該当する資料が約 650 点あると考えられる(17)。

**注**

(1) これまでは「石浜」「石濱」の表記が混在していた。本稿では，過去の出版物も含めて，本来の表記の「石濵」に統一する。本稿は 2014 年 12 月 20 日の研究セミナー「戦前期モンゴル語新聞『フフ・トグ（青旗）』のデジタル化と公開の可能性」での，表題の報告を文章化したものであるが，先行する「石濵文庫資料調査・研究の過程と展望」（『東洋学者・石濵純太郎をめぐる学術ネットワークの研究』平成 24 年度大阪大学文学研究科共同研究・研究成果報告書，pp.23－34）と部分的に内容が重なる前半 1，2 については簡略に記す。

(2) 青江舜二郎『竜の星座－内藤湖南のアジア的生涯』中公文庫，1980 年，pp.287－288。藤枝晃「町人学者・石濵純太郎」『図書』（岩波書店）234 号，1969 年 2 月，pp.30－33。後者は，内藤湖南「大阪の町人と学問」（『日本

文化史研究』全集第 9 巻所収）を下敷きにして書かれている。

(3) 西田龍雄「石濵先生の蔵書をめぐって」『（大阪外国語大学附属図書館）館報』No.2，1975 年 2 月， pp.4－5。前掲藤枝晃「町人学者・石濵純太郎」。大庭脩「『江戸時代における唐船持渡書の研究』あとがきより」吾妻重二編著『泊園書院歴史資料集』2010 年，pp.332－335。

(4) 講演者の田中克彦と筆者の紹介した石濵文庫資料は，いずれも文庫目録に載らない整理途上・未整理の資料であった。『大阪大学附属図書館報』vol.43 no.3， 2010 年 3 月，pp.1－6 参照。（http://www.library.osaka-u.ac.jp/publish/kanpou/170.pdf）

(5) 研究課題の一つに「貴重資料など所蔵資料の保存，公開，データベース化及びその利用に関する調査（懐徳堂，適塾資料，各種文庫資料など）」がある。筆者が石濵文庫資料担当の室員となった。

(6) 2014 年度に総合図書館貴重コレクション室に移された外国学図書館（旧大阪外大図書館）からの貴重書には，石濵文庫以外にも貴重な満洲語文献が含まれる。著名な松筠『百二十老人語録』の他，『庫倫事宜』，乾隆五十二年七月の「将軍五部行文檔」，乾隆期からの満漢文誥命 3 通など，これらも含めた調査の必要がある。

(7) これまでの調査・整理分については，拙稿「石濵文庫の拓本資料 概要とモンゴル時代石刻拓本一覧」『大阪外国語大学論集』第 35 号, 2006 年, pp.181-192；「石濵文庫拓本資料調査の概要－2006 年度前半まで－」『13, 14 世紀東アジア諸言語史料の総合的研究—元朝史料学の構築のために—』2007 年, pp.131－138；「大阪大学附属図書館所蔵 石濵文庫の隋唐時代墓誌拓本」『待兼山論叢』第 48 号文化動態論篇，2014 年，pp.1－17 参照。

(8) 藤岡穣「石濵文庫の龍門石窟写真について」『石濵文庫の学際的研究—大阪の漢学から世界の東洋学へ—』平成 23 年度大阪大学文学研究科共同研究・研究成果報告書，2012 年，pp.7－8。ニコライ・ネフスキー関連の資料写真も「石濵文庫写真集」および未整理の写真資料の中に含まれる。

(9) 飯塚一幸「石濵文庫の書簡類の整理をめぐって」前掲『石濵文庫の学際的研究』p.4；生田美智子『資料が語るネフスキー』2003 年；加藤九祚『完本 天の蛇－ニコライ・ネフスキーの生涯』2011 年；前掲『東洋学者・石濵純太郎をめぐる学術ネットワークの研究』資料篇；拙稿「石濵文庫所蔵の桑原隲藏書簡」『待兼山論叢』第 46 号文化動態論篇，2012 年，pp.1－20。『小出楢重の手紙—石濵純太郎宛書翰集—』大阪市史料調査会, 2012 年。

(10) 大正初年から始まる石濵の学術活動前半と重なるこの時期に，彼がどのような手段で資料を入手したのかという観点からの調査も必要である。

漢語（漢語とのバイリンガルを含む）の図書・逐次刊行物は，文庫目録で「漢籍の部」の「新学部」（pp.171－197）に収録される。未整理資料には, たとえば日本占領期のフィリピンにおける日本語教育用の教科書（タガログ語か？）と思しき冊子などがある。

(11) *Köke tuγ* は，石濵文庫にほぼ全号揃うが 5 号分欠号。日本では他に東京外国語大学に数十部（石濵文庫の欠号を補う号あり），　京都大学人文科学研究所に創刊号から 41 号の所蔵があることが知られる。くわしくは，周太平，内田孝両氏の報告参照。これらの新聞の歴史的背景は，広川佐保「1940 年代の日本の対内モンゴル政策と『フフ・トグ』紙」,『日本モンゴル学会紀要』第 28 号，　1997 年；同「満洲国のモンゴル語定期刊行物の系譜とその発展」,『環日本海研究年報』14，　2007 年；同解説『満洲国期におけるモンゴル語刊行物:〈復刊〉『モンゴル・セトグール』『スンソゴル』『ヒンガン』』，新潟大学環東アジア研究センター，　2013 年を参照。小野寺史郎「現代中国研究センター配架図書に関する二, 三の覚書」,『人文』第 61 号，　2014 年を参照。付録のカレンダーについては，拙稿「チンギス・カン画像の“興亡”」前掲『石濵文庫の学際的研究』pp.21－37。小長谷有紀「チンギス・ハーン崇拝の近代的起源」『国立民族学博物館研究報告』37-4，2013 年，pp.425－447 参照。

(12) *Барга : издано съ разрѣшенія начальника заамурскаго округа отдѣльнаго корпуса пограничной стражи при содѣйствіи штаба сего округа* / A. Баранов，Харбинъ，1912，59 p.，[4] folded leaves of plates : maps（some col.）; 26 cm [請求記号 292.25/B21b]。田中克彦『ノモンハン戦争 モンゴルと満洲国』岩波新書，2009 年，p.44。中東鉄道警備隊の正式名称が「独立国境警備軍団ザアムール管区」（麻田雅文「中東鉄道警備隊と満洲の軍事バランス：1897-1907 年」『「スラブ・ユーラシア学の構築」研究報告集』17，2006 年，p.87）。

(13) 前掲『大阪大学附属図書館報』vol.43 no.3，　2010 年 3 月，pp.3-4。

(14) 石濵の東京帝国大学での卒業論文「欧陽脩研究」の他，大学出講時の資料や石濵家家政資料もあるが未整理。

(15) これらの問題は本科研計画だけでなく，本研究セミナーの共催者「21 世紀課題群と中国」（大阪大学未来研究イニシアティブ）」での，東アジア地域研究に関わる多言語の複合的学術資産活用モデルを導き出す研究計画の一部に位置づけられている。

(16) 石濵は懐徳堂文庫の事業運営委員の一人となった（1950 年）。石濵が運営にも尽力した漢学塾・泊園書院の資料（泊園文庫）が関西大学に入るにあたっては，教授であった石濵の与るところが大きかったと考えら

れる。また泊園文庫には，石濵文庫の研究に不可欠な『泊園』（1927〜1943年）を所蔵する。逆に石濵文庫に泊園書院関係資料の所蔵もある。内藤文庫（内藤湖南と長男の内藤乾吉の蔵書）の書簡類などの研究は，石濵文庫の書簡資料研究の参考になり得る。

(17) 和書では約 370 点,「G 國書」（日本人が漢文で書いた書籍）では約 280 点。いずれも近代以前と推定される写本を含む概数である。国文学研究資料館の「日本古典籍総合目録 DB」には，これらは現在加わっていない（懐徳堂文庫の和書も同様）。なお，大阪大学の外国学図書館所蔵の「旧分類（大阪外国語学校，および附設の第五臨時教員養成所の旧蔵書）」にも対象資料が相当数あることにも注目すべきである。現在は和装本として一括されて排架され，和書・漢籍が混淆している。ここには，清末民国初に北京で出版された『天方詩経』ほか，ムスリム漢文文献 37 点，多数の満洲語文献もあり，調査が必要である。また研究史上で著名な，内藤湖南が 1906 年に奉天で自ら異同を書き込んだ『蒙古源流』漢文版もある。